

○ としての態度で臨んでいた。アンケートで
 △ は「もっと積極的に発言しなければなら
 上 ない。人前で話したりするには吹き替え
 位 練習はよい訓練だ」と答えており、発言
 √ が十分でないという自己評価と、よいこ
 男 とだからもっと真剣に取り組まねばなら
 子 ないという意識も表れていた。事後アン
 ケートでは「実用的な英語を覚えてよか
 った」と評価したり、「もっとまじめに
 やるんだ」と反省したりしている。
 授業中の態度や照れ屋である性格などと
 併せて考察すると、コミュニケーション
 活動の重要性は十分認識したことが感じ
 られる。

生徒
 T 本来まじめな生徒であるため、6、7
 △ 月には大きな変化は見られなかった。し
 上 かし、9、10月には声も大きくなり、
 位 積極性などのプラスの変化が見られた。
 √ また、7月に行った中間アンケートでは
 女 「しっかり勉強して、2学期には勇気
 子 をもって発表したい」と答えていた。彼女
 自身の課題が回答の中に明確に表れてい
 る。事後アンケートでも「コミュニケーション
 をすることの大切さがよく分かつた」と書
 いており、次第に積極的に英語
 で会話することができるようになり、意
 識が着実に高まったことが感じられた。

英語のコミュニケーションは簡単だから、
 出来るまでこの苦学するから、これから
 英語を勉強して外国の人
 と話をできるようにしたい

自分も、ほんとに英語は、よめず、
 かけこいてやなくて、最初は、
 楽しくやっていた。けど、
 結果は、どうやら、
 ちゃんと、楽しくて、
 いろいろ、
 いろいろ、

* 評定の在り方

生徒指導要録の評定の観点は、新しい学力観に沿って設定されたものであることは言うまでもない。観点別学習状況の評価の方法については絶対評価である。アンケートの結果などから実際の評定の状況をきくと、観点別の評価は評定をする際に一部参考にする程度であり、評定をほとんど決めてから最後に若干考慮に入れることが多いようである。しかし、観点はそれぞれが学力の一部であり、その総合から相対評価によって評定が決められるのが本筋であると考えられる。そこで、生徒Dを例にとり、今回のようなコミュニケーション活動の評価を生かした評定の例を示してみる。これは、あくまでも一つの例であり、学期の生徒の活動やテストなど全てを材料にしたものではない。各観点の評価から、評定を導き出す過程を示したものである。

① 各評価方法と評定とのかわり

- ・自己評価 — 個人の性格によって左右されることが少なくないため、評定に直接使用するには客観性に問題がある。また、生徒が学習の価値を認め、意欲が高まることによって、かえって自己評価を厳しくする傾向も見られる。
- ・相互評価 — 人間関係により甘くなりがちであるが、今回の活動のようなジャッジとしての相互評価は生徒もその価値や方法に対して信頼しており、評定の客観的な材料の一部として使用しても問題はないと考える。
- ・教師からの評価 — 自己評価や相互評価から見られるものに対して適切にフィードバックを繰り返し、観点に従って目に見えるものを客観

生徒のコミュニケーション活動に対する感想

英語が外国人とコミュニケーションするのと、自分の
 考えと、自分の文化を教えるのと、向かい合う、考えが
 相手国の文化を知ることができて自分の視野を広
 げることができた。また、英語を話せる
 ことも、コミュニケーションが、
 たいと感じた。